

### 3. 「すずの音ホール」建設に関する財政措置

松川村での多目的文化施設建設事業にかかわる総事業費は下記の通りです（資料1）。

とくに注目すべきことは、事業基金を平成9年度から平成20年度まで12年にわたって積み立てていること、その総額が実に7億5千万円にのぼっていることです。

当然ながら、この基金は使うためのものです

から、平成18年度から4年間にわたって順次とりくずし、総額6億2千万円を事業に充当しています（資料3）。

「すずの音ホール」の建設だけの事業費では、新たな起債が全くないことに注目しておく必要があります。なお、下記のデータは松川村の公表されている資料から作成したものです。

【資料1】 都市公園事業・まちづくり交付金事業 総計

単位：千円

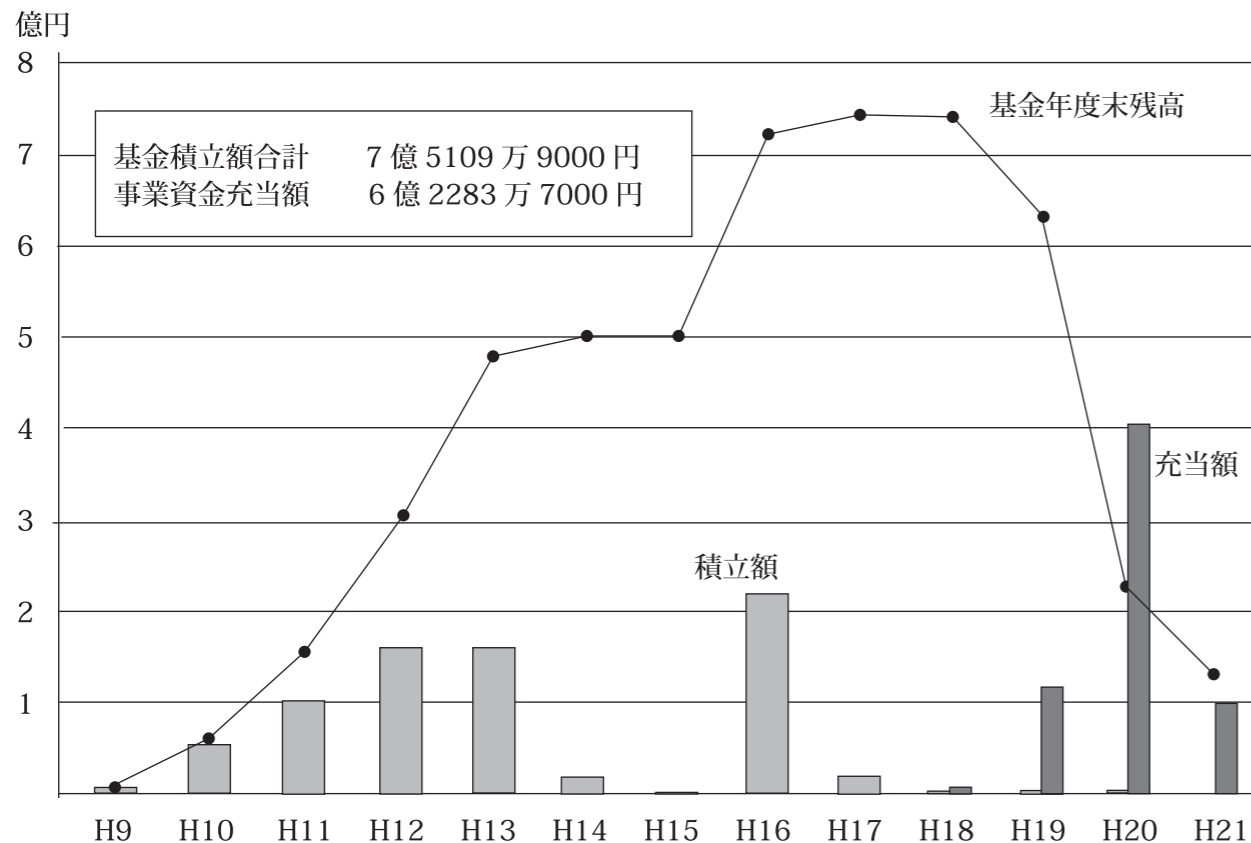
総事業費	国庫補助交付額	基金充当額	起債借入額	一般財源
2,079,223	799,700	622,837	557,500	99,186

【資料2】 すずの音ホール（周辺整備含む）建設 総計

単位：千円

総事業費	国庫補助交付額	基金充当額	起債借入額	一般財源
1,132,223	410,200	622,837	0	99,186

【資料3】 多目的文化施設建設事業基金の推移



### 4. 松川村の経験から何を学ぶか

#### (1) 村民の意見を取り入れ、村民合意で施設を建設

「すずの音ホール」を実際に建設するまでには決して平坦な道ではありませんでした。

経過でも明らかにしたように、前町長時代に村は唐突に公園事業計画を打ち出し、村民にはかることなく実行しようとしています。

しかし、果たして公園があるのかどうか、文化施設を充実させることが先決ではないのか、いやハコモノは必要ないのではないかなどさまざまな意見が噴出する中で、公園事業は実質的に用地買収だけで終わります。

その後、新村長の誕生を契機に、ワークショップ形式で議論を重ねて村民全体で問題を共有し、文化施設をつくろうという機運へと発展するのです。

村民の参加への熱意と、これにこたえようとした行政側の考えとが寄り合わされて、最終的に村民合意の施設建設が実現したのです。ワークショップには初回で120人、毎回出席する人や時々参加する人など、参加の仕方はさまざまでしたが、結局数十回に及ぶワークショップが実質的な企画立案の舞台となり、その都度ステージを替えながら、時々課題に即応した活動を展開していくこととなります。

たとえば、交流施設の着工後のワークショップの課題は、備品の選定、施設の管理運営に関する事項の審議などというように。

そして、施設完成後は、「すずの音ホール」応援団として村民の施設使用を促進し、自らも活発に利用、村民の施設となるように努力をかさねているのです。

#### (2) 自己資金を計画的に積み立て、村の財政に負担をかけていない

松川村が、何年にもわたって基金を少しずつ積み立てていることは特筆すべきことです。

【資料3】からも分かる通り、必ずしも一定額ずつ積みたてているわけではなく、財政状況を見ながらその年に応じた積み立てを行っています。

松川村の場合の目的別積み立ては、文化施設目的の積み立てばかりではありません。

松川村は、池田町とは対照的に財政調整基金はそれほど積み立てておらず、圧倒的に目的別の積み立てになっています。

もちろん、積み立てだけで建設ができるわけではありませんから、事業全体としては5億円以上の借金もしているのですが、もともと起債残高が池田町よりも少ないため、村財政にはそれほど大きな負担とはなっていません。（池田町調整研究会「町づくりビジョン2012」、付属資料「財政白書2012」参照）

#### (3) 国の交付金を当て込んでたてた計画ではない

経過からも明らかな通り、多目的文化施設をつくるためのワークショップを経て、基本計画策定を終え、その後で国の交付金を申請するという手順を踏んでいます。

そのため、「すずの音ホール」とその周辺事業だけに限ると、【資料2】からも明らかな通り国の交付金、積立金、一般財源だけ建設が行われて、そのための新しい借金はゼロ。

池田町でいま問題になっている社会資本総合整備事業の場合、国庫補助交付金額は40%とほとんど変わりませんが、残りの60%約11億円は積み立ての取り崩しと新しい借金でまかなうと説明されています。「ニューズレター Vol.2」も認めるとおり財政への圧迫は必至であり、松川村と著しい対照を示しています。